魚津市埋蔵文化財調査報告第10集

富山県魚津市

遺跡分布調査概要 I

1983

魚津市教育委員会

例　　言

1．本書は魚津市教育委員会が国庫補助金の交付を受けて実施した昭和57年度市内遺跡分布調査事業の概要報告書である。

2．調査は昭和57年７～８月，昭和58年１月，同３月の３期にわたって実施した。

3．調査対象地区は，富山県教育委員会と建設省の依頼により，国道８号線バイパス建設予定地とその周辺地区とし，その他に近年開発が著しい天神台地を加えた。

4．調査の方法は踏査を原則とし，発掘調査はおこなっていない。しかし，台地上の工事現場では立合い調査を随時おこなっている。今回所在が確認された遺跡の範囲はすべて推定範囲である。遺物の散布状況や地形を考慮して推定したもので，正確な遺跡の範囲を把握するためには試掘調査を実施する必要がある。

5．調査は市教育委員会社会教育課麻柄一志を担当者とし，市文化財調査委員会・博物館協議会の協力を得た。遺物整理は麻柄幸子がおこなった。

6．遺跡名は字名を基本とし，同一字の中に複数の遺跡が所在する場合にはそれにＡＢＣ……を加えた。

7．調査から報告書作成にいたる過程で下記の方々から協力・助言を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

桜井隆夫，斎藤隆，山本正敏，林周治，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター，魚津市立歴史民俗資料館

I はじめに

魚津市内に分布する埋蔵文化財包蔵地については，1972年に富山県教育委員会より『富山県遺跡地図』が刊行されている。また，1973年には魚津市教育委員会が魚津考古学会に調査を委託した『魚津市埋蔵文化財遺跡分布調査報告書』が刊行されており，ある程度の遺跡の分布状況が明らかにされている。

しかしながら10年後の今日，郊外の開発が盛んにおこなわれだしたことにより，より詳細な遺跡分布図の作成の必要性が高まった。魚津市は面積が200㎢余りであるが，沖積地が少なく，大部分が山地と洪積台地によって占められている。いきおい1970年代に始まる大規模開発は，市街地の背後の洪積台地に向けられている。こうした傾向に拍車を加えたのが北陸自動車道の建設である。

今回の分布調査はこうした実情を踏まえて，特に開発が著しい野方台地と天神台地を対象におこなった。

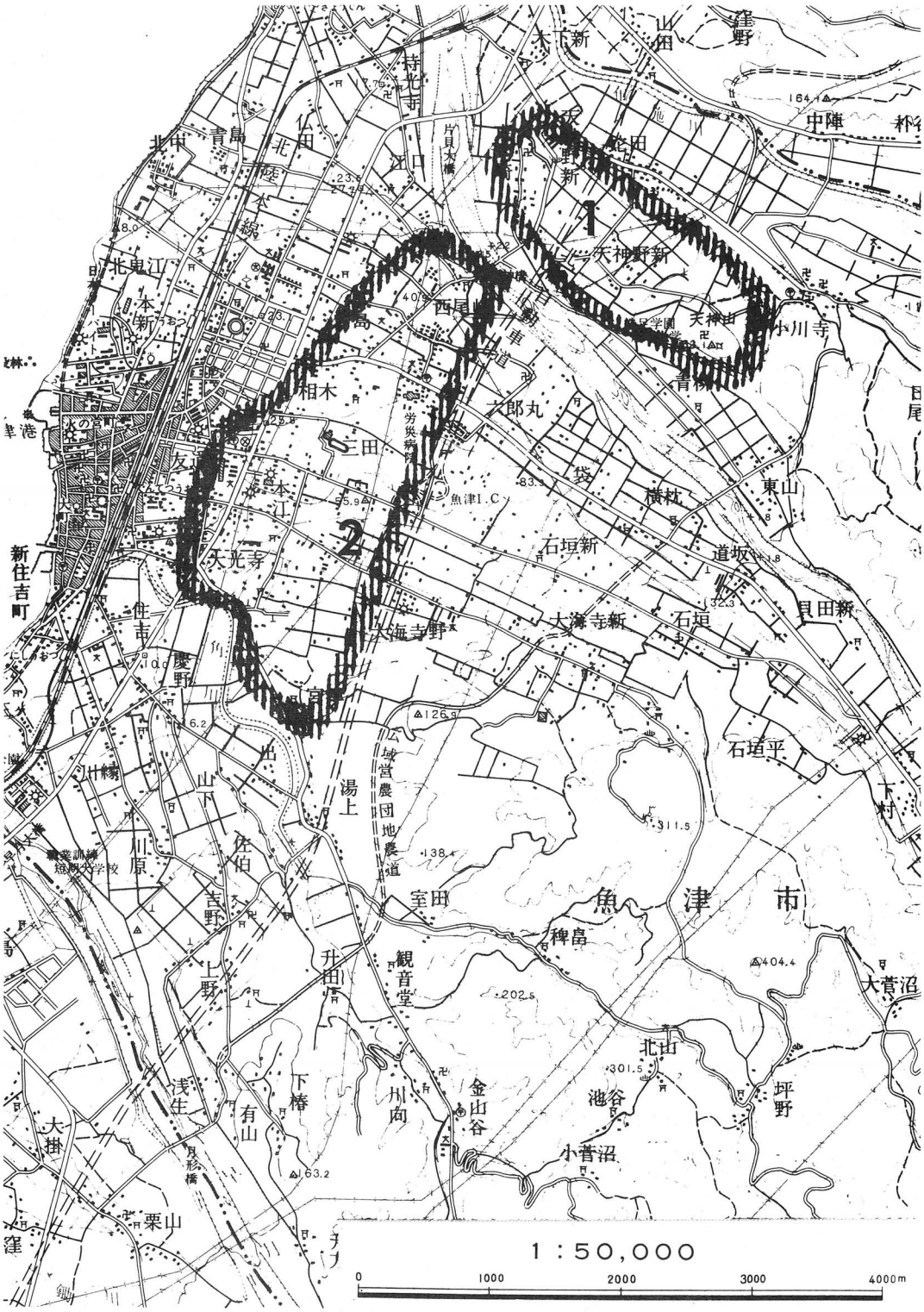
野方台地では，北陸自動車道と市街地のほぼ中間地点を，建設省による国道８号線バイパス建設計画が進められており，建設省と富山県教育委員会より予定路線周辺の遺跡詳細分布調査の依頼を受けているため，国道８号線バイパス建設予定地を重点として分布調査をおこなった。

天神台地では，1979年に洗足学園短期大学が開校しており，今後の開発が予想されることから分布調査が急がれていた。

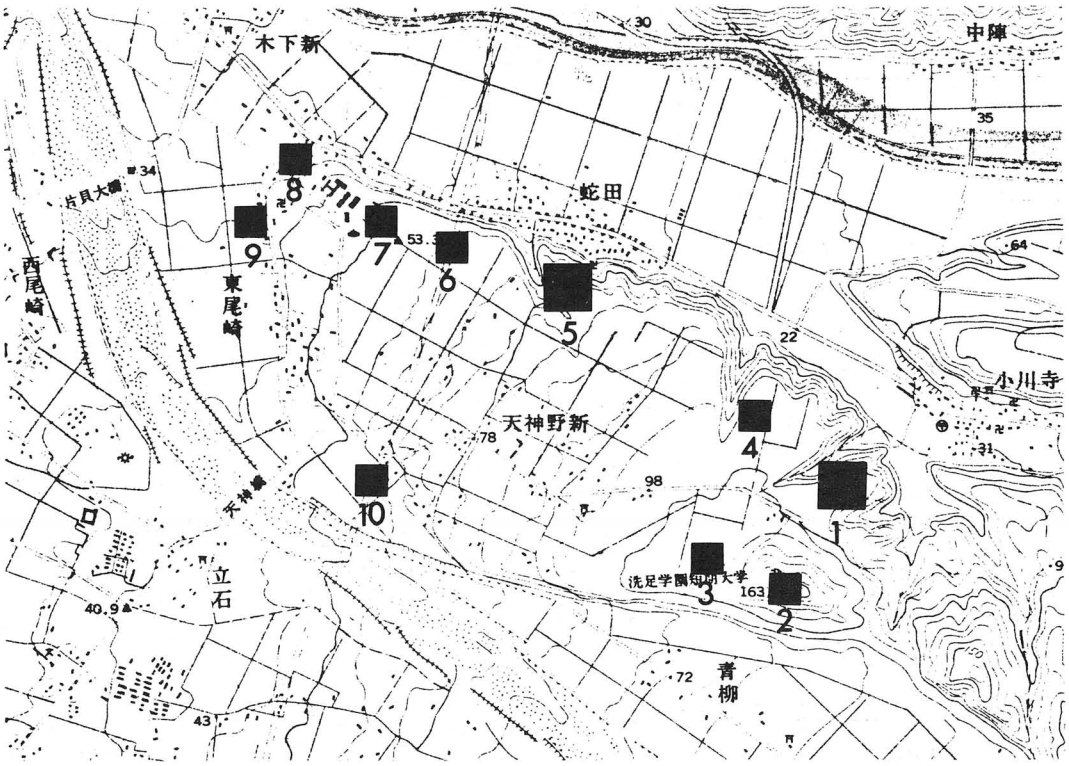
II 調査の概要

分布調査では天神台地上で10遺跡，野方台地で14遺跡を確認することができた。しかしながら調査は踏査を中心としたもので，発掘はおこなっておらず，遺跡の範囲は明確ではない。また，新発見の遺跡の中には，土器片一点のみの採集といった遺跡があり，埋蔵文化財包蔵地として認定しうるか疑問のある遺跡もある。今後，継続的な踏査をおこなう必要がある。

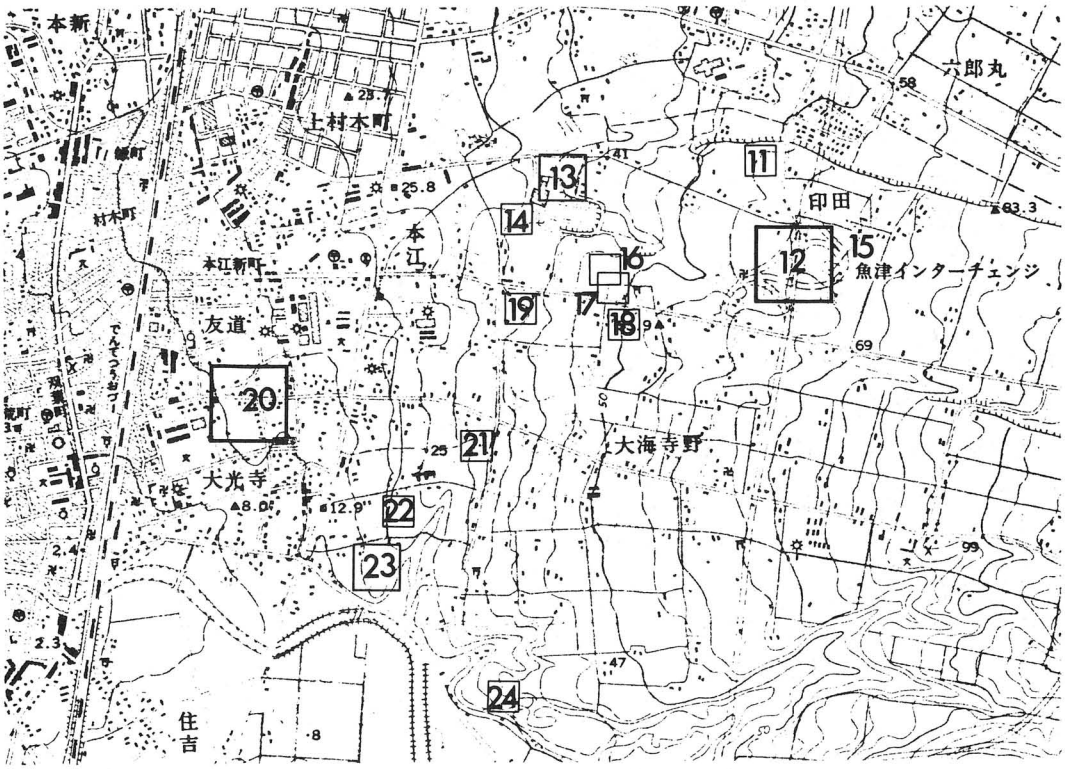
今回特に重点的に調査をおこなった国道８号線バイパス周辺地区では，14本江Ｂ遺跡が路線内に含まれることが判明し，19本江Ｃ遺跡，22友道神明社遺跡が予定路線に隣接することがわかった。本江Ｂ遺跡には何らかの保護措置を講ずる必要があり，本江Ｃ遺跡，友道神明社遺跡はその広がりを把握しなければならない。



第１図　分布調査実施地区　　１．天神台地　　２．野方台地



第２図　天神台地の遺跡（1/25000）



第３図　野方台地の遺跡（1/25000）

III　各遺跡の概要

a．天　神　台　地

遺　跡　一　覧　表

番号	遺　跡　名	所　在　地	所属時代	立地	出土品・その他	県番号
1	天神山遺跡	魚津市小川寺	縄　文	畑　地	土器・石器	1084
2	天神山城遺跡	魚津市小川寺	古墳・中世	山　地	土器	1085
3	洗足学園遺跡	魚津市天神野新	縄　文	校地内	土器	
4	天神山Ｂ遺跡	魚津市小川寺	縄　文	畑　地	土器	
5	蛇田遺跡	魚津市天神野新	縄　文	墓　地	土器・石器	1088
6	天神野新Ａ遺跡	魚津市天神野新	縄　文	水　田	土器・石器	
7	天神野新経塚遺跡	魚津市天神野新		水　田	一字一石経	1090
8	天神野新Ｃ遺跡	魚津市東尾崎	縄　文		土器	1089
9	東尾崎遺跡	魚津市東尾崎	縄　文	水　田	土器・石器	1091
10	天神野新Ｂ遺跡	魚津市天神野新	縄　文	水　田	石器	

1．天神山遺跡

魚津市内で最も古くから知られた遺跡の一つで，明治年間には鳥居龍蔵・坪井正五郎らによって調査がおこなわれている。1955年には酒詰仲男の指導を得て，富山考古学会が発掘調査をおこなっており，縄文時代中期中葉の標式遺跡として知られている。

遺跡は布施川に面した河岸段丘上にあり，南と北を小さな谷に挟まれた舌状台地に位置している。遺物量は多く，今回の踏査でも縄文土器・石器を多数採集している（文献１）。

2．天神山城遺跡（第14図）

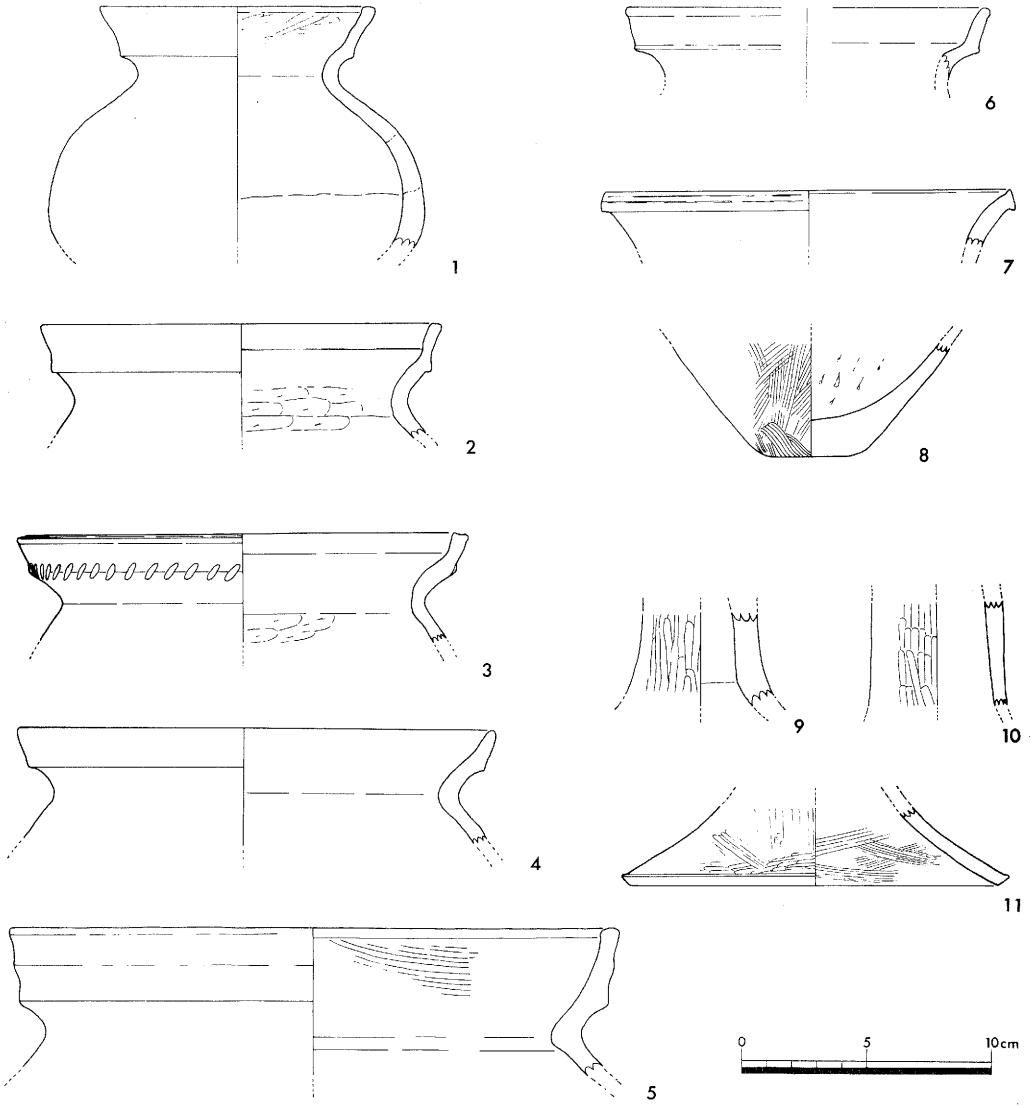
天神台地の最奥部に位置する独立丘陵上に所在する。独立丘陵全体は中世の山城として著名であるが，本丸から二の丸にかけて古墳時代初頭の土器が散布しており，高地性集落と考えられる。採集土器は第４図に示したようにほとんど単一期のものと思われる（文献２）。

3．洗足学園遺跡

天神山山麓の洗足学園魚津短期大学の校地内に所在する。縄文土器の小破片が採集されたが時期不明。採集地点は３ヶ所にわたっている。隣接する市営グランド造成の際にも土器が出土したといわれており，天神山西麓一帯には，このような小散布地が点在していたものと思われる。

4．天神山Ｂ遺跡

天神山遺跡と小さな谷を挟んで西に隣接する河岸段丘に位置する。遺跡は畑地の中であるが，採集できたのは縄文土器と考えられる土器片一点のみである。洗足学園遺跡と同様に，天神山遺跡を中心として周辺に点在する小散布地の一つであろう。



第4図　天神山城遺跡出土の土器

5．蛇田遺跡

布施川に面した河岸段丘に位置する。現在共同墓地となっており，墓地と周囲の畑地から土器石器が多数出土している。遺物は縄文中期の土器片が中心で，打製石斧・磨製石斧が採集されている。

6．天神野新A遺跡

布施川に面した河岸段丘上に位置する。1981年に北陸自動車道建設に伴う緊急調査がおこなわれ，縄文中期初頭の竪穴住居跡が発見されている。遺跡地は水田となっており現在では遺物の採集はできない。

7．天神野新経塚

天神台地の末端近くに所在する。現場圃場整備のため消滅。一字一石経出土。

8．天神野新C遺跡

天神台地の末端の段丘上に位置する。金太郎温泉の駐車場となっており大半が破壊されていると考えられる。かつて縄文土器の破片が採集されたが，現在は採集できない。詳しい時期等は不明である。

9．東尾崎遺跡

天神台地と沖積地の境を中心に遺跡は広がる。1963年に天神小学校が発掘調査をおこなっている。1968年に一帯で圃場整備が実施され，遺跡の一部は破壊された。出土品は多く，縄文中～後期の土器片・石器が採集されている（文献３）。

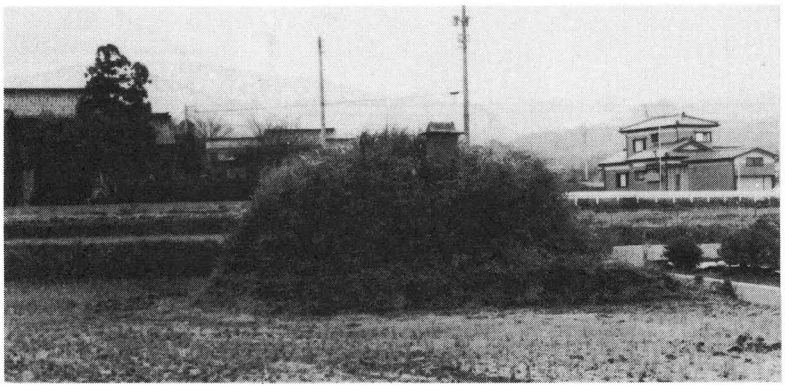
10．天神野新B遺跡

片貝川に面した低位段丘上に位置する。天神台地より一段下った段丘である。北陸自動車道建設に伴う緊急調査が実施されたが，打製石斧一点が出土したのみで，過去においても土器片の採集はない。

b．野　方　台　地

11．印田大塚（第５図）

片川に面した河岸段丘に位置する。高さ約2.5m，径約10mを測る。1980年の圃場整備によって周辺の水田面が下ったため，見かけ上約50cm程高くなった。墳頂部に小さな祠がある。別名狐塚とも称する。



第５図　印　田　大　塚

12．印田遺跡

野方台地の中央部に位置する。1980年・81年の２ヶ年にわたって，北陸自動車道建設に伴う緊急調査がおこなわれている。遺跡の範囲は約30万m²にわたっているが，各時期の小規模遺跡の複合と考えられる。インター・チェンジに係る地点約20万m²を対象に発掘調査がおこなわれたが，縄文時代晩期の住居跡１棟，古墳時代中期の住居跡１棟が検出されたのみで，他に縄文中～晩期の小規模な包含層が数ヶ所確認されているにすぎない。遺物包含層はかなり深く50～100cmを測る。周辺にこのような小規模散布地はまだ数多く存在するものと予想される。

野方台地遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	所属時代	立地	出土品・その他	県番号
11	印田大塚	魚津市印田		水田		
12	印田遺跡	魚津市印田	縄文古墳	水田	土器・石器	1076
13	本江A遺跡	魚津市本江	縄文	水田	土器・石器	1072
14	本江B遺跡	魚津市本江	縄文	水田	土器・石器 8号線バイパス内	1073
15	印田近世墓	魚津市印田	近世	水田	蔵骨器	
16	本江C遺跡	魚津市本江	中世	水田	土器	
17	丸塚	魚津市本江				
18	灰塚	魚津市本江				
19	本江D遺跡	魚津市本江	中世	水田	土器	
20	友道遺跡	魚津市友道	古墳奈良	宅地 畑地	土器	1069・1070 1071
21	友道神明社遺跡	魚津市友道	中世	畑地	土器	
22	大光寺B遺跡	魚津市大光寺	奈良	宅地 畑地	土器	
23	大光寺遺跡	魚津市大光寺	縄文	水田	土器・石器	1065
24	宮津B遺跡	魚津市宮津	縄文	水田	土器	1063

13．本江A遺跡

市営グラウンドの造成によって発見された遺跡である。出土遺物は縄文時代中期から晩期にわたっている。特に縄文後・晩期の土器片が多いのと，完形の石棒の出土で知られている。グラウンド造成工事によった大半が消滅していると考えられる。

14．本江B遺跡

本江A遺跡から約300 m離れて小さい谷を挟んで対峙する水田に遺跡は位置する。散布範囲は狭く約300㎡余りである。出土遺物は縄文土器と石器であるが量は余り多くない。国道8号線バイパスに完全に含まれる予定である。

15．印田近世墓

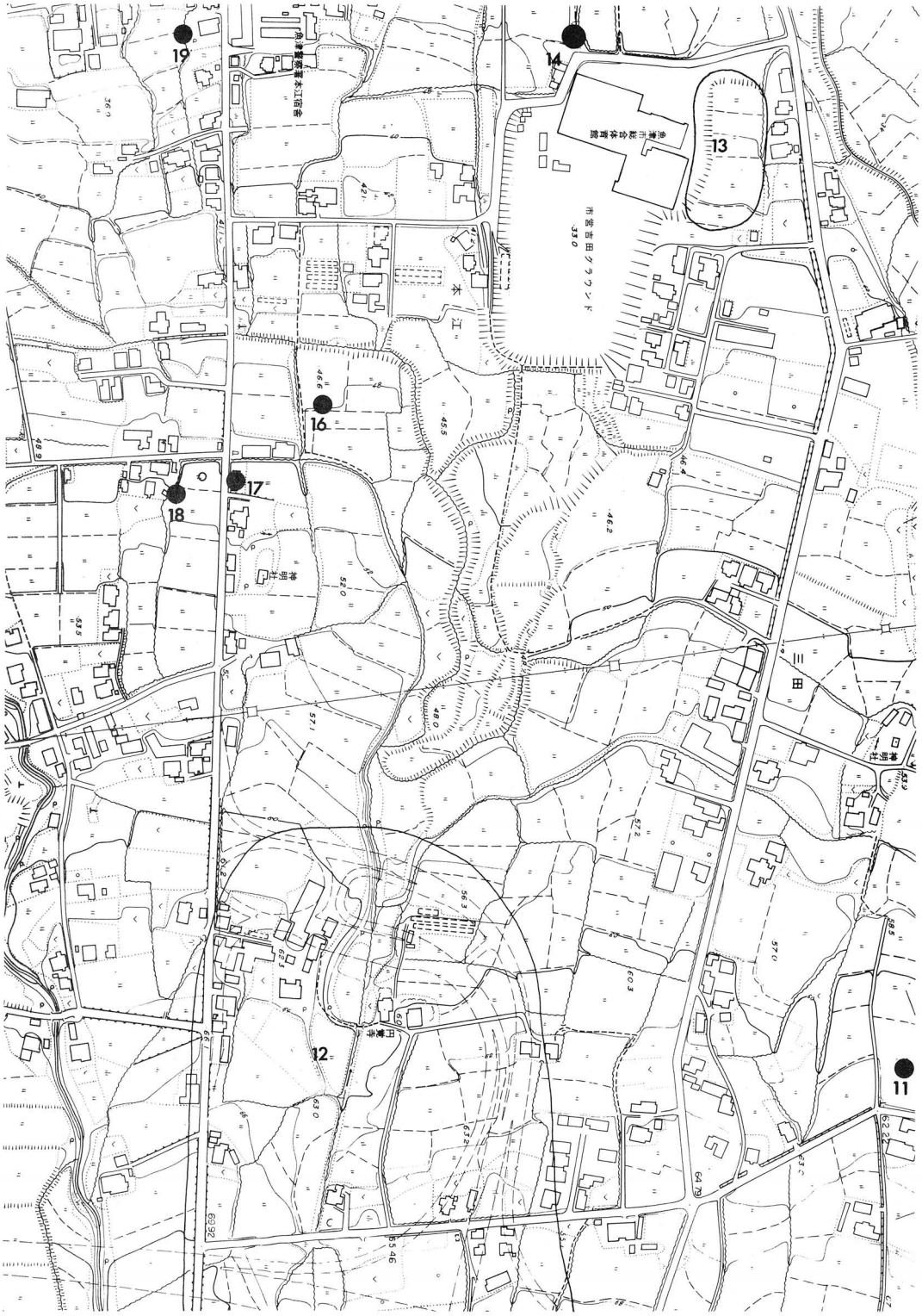
印田遺跡の東約100 mの地点に位置する。板石塔婆と小さな墳丘が存在していたため，1980年に圃場整備のため発掘調査がおこなわれた。墳丘からは江戸時代に属する蔵骨器が出土。現在は消滅し，水田となっている（文献4）。

16．本江C遺跡

野方台地のほぼ中央部に位置する。珠洲焼の破片が一点採集されている。採集地点は近年圃場整備がおこなわれており，採集遺物もかなり移動しているものと思われる。なお，周辺に「テラヤシキ」の小字があり，中世に寺院が存在した可能性がある。

17．丸塚（第7図）

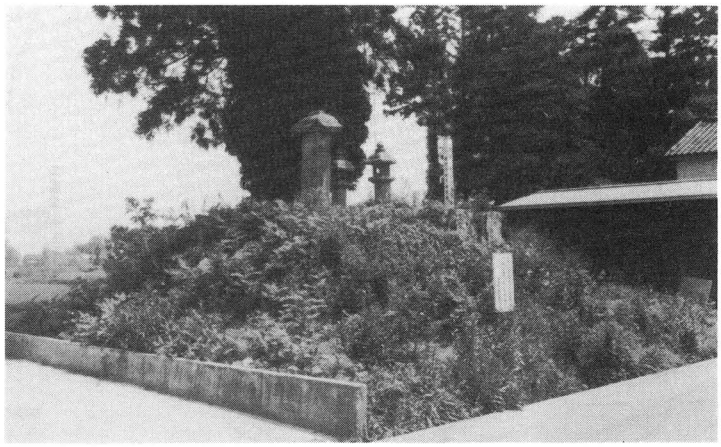
野方台地上に位置する。高さ約2 m，径約10cmのほぼ円形の塚である。塚上に市指定文化財大音主馬の碑がある。石碑は初代魚津奉行大音主馬の百回忌の享保20年（1735）に建てられたもの



第６図　本江地区分布図（１/5000）

で，地元では大音主馬の墓であるという伝承がある。形態からは中世墳墓の可能性がある。

なお，丸塚は県道魚津インター線の拡張予定地に含まれており，今春に発掘調査が実施されることになっている。



第7図　丸　　塚

18．灰塚

丸塚の南約40ｍの地点に径８ｍ，高さ２ｍの円形の塚がある。伝承では大音主馬を火葬にした際の灰を埋めたといわれ，そのために灰塚と呼ばれている。また大音主馬の妻の墓という伝説がある。これも中世墳墓の可能性がある。

第8図　灰　　塚

なお，地籍図によれば明治年間に灰塚と丸塚の間にもう一基の塚が存在していたことがわかるが，現在は消滅している。大海寺野地内にも『四ッ塚』という地名が残っており，かつて塚が存在したことを示している。

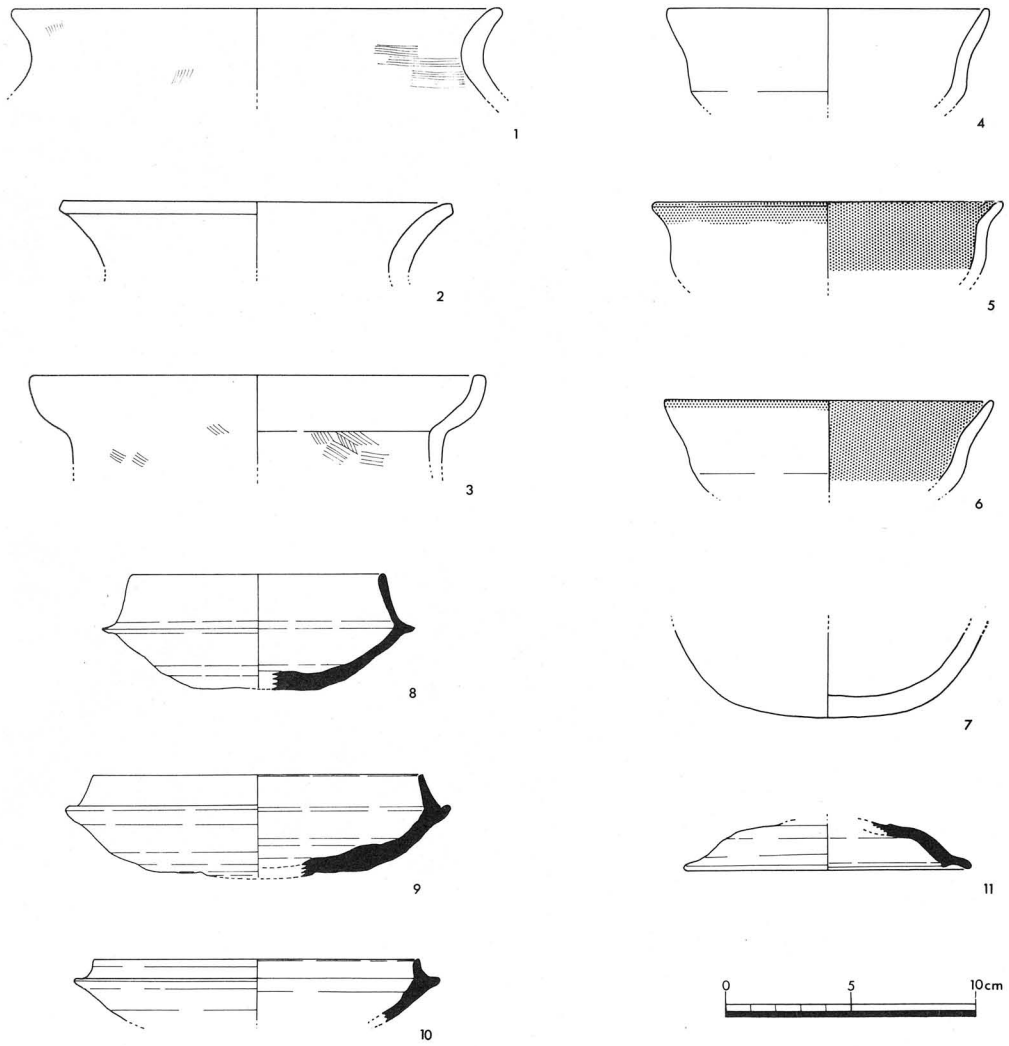
19．本江Ｄ遺跡

野方台地の中央部に位置する。珠洲焼の小破片が採集されている。遺跡の広がり等は不明である。国道８号線バイパス予定地に隣接している。

20．友道遺跡

遺跡は野方台地の未端の沖積地に移行する接点に位置しており，標高は10～15ｍを測る。海岸からは約１kmの距離にある。富山県遺跡地図によれば，友道遺跡はＡ遺跡（No.1070），Ｂ遺跡（No.1071），Ｃ遺跡（No.1069）の３地点にわかれている。３地点はそれぞれ一つの遺跡として登録されているが，約300ｍの距離で接しており，遺物包含層が深く，遺跡の発見の契機が土木工事の際であり，遺跡の規模が不明であることなどから，一つの大遺跡であると考えられる。付近はもともと市街地から少しはずれた果樹園の広がる農村地帯であったが，市街地に近く，都市計画が進められており，現在では道路が整備され，住宅が建ち並んでいる。

図示した遺物は，県道坪野・本町線の拡張工事の際の出土遺物である。遺物は古墳時代に属す

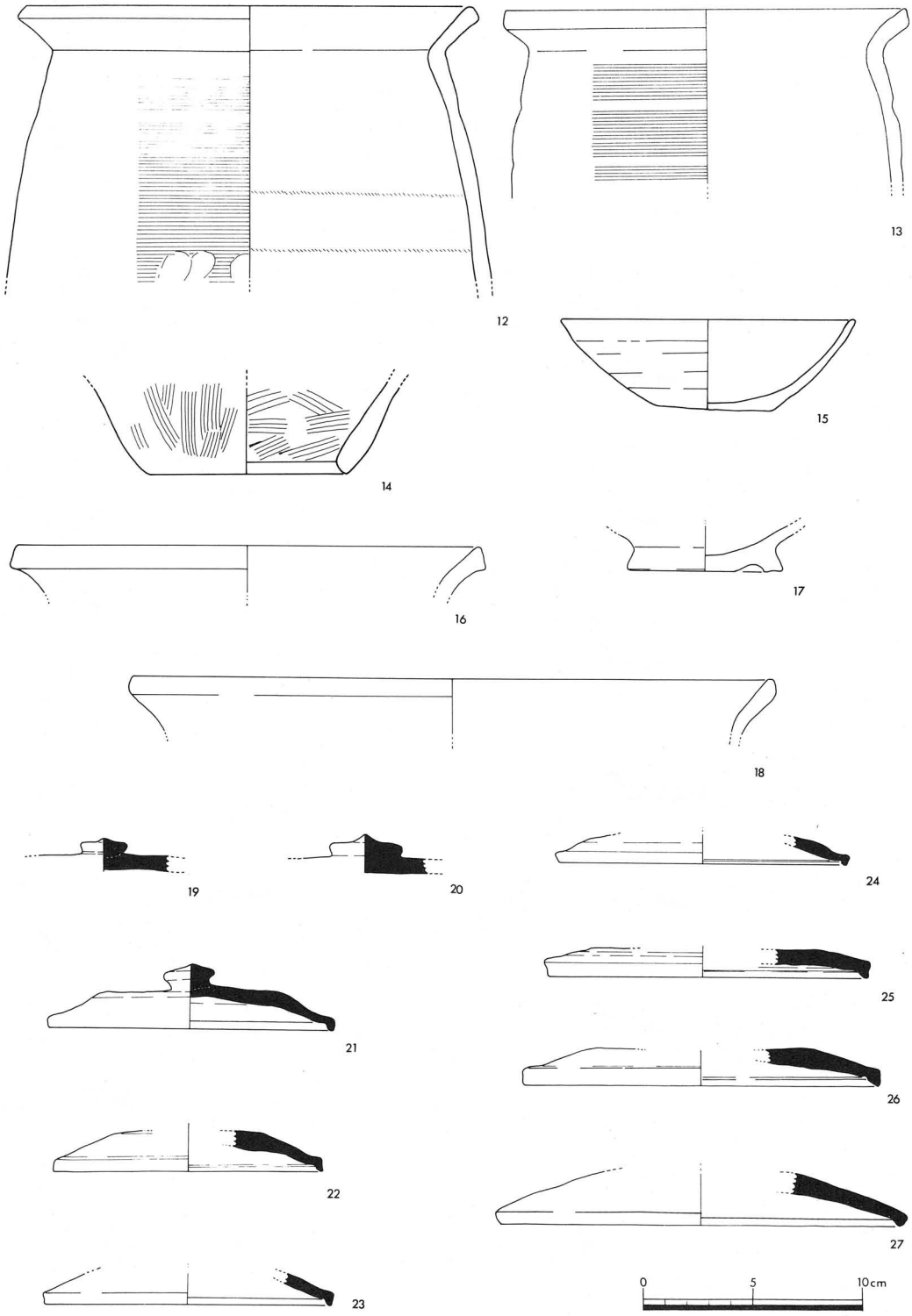


第９図　友道遺跡出土土器（古墳時代）

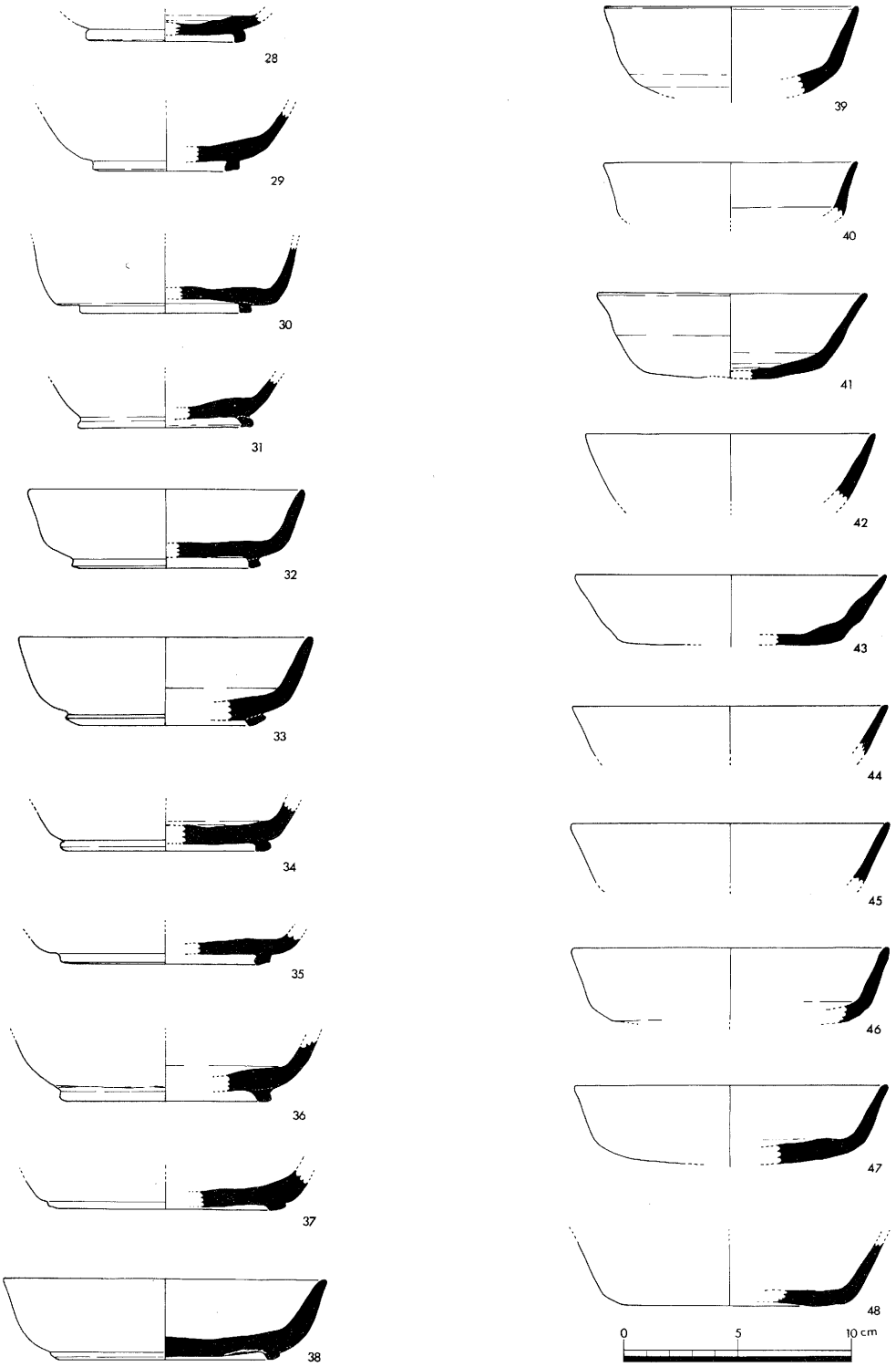
るものと，奈良・平安時代に属するものに２大別できる。

古墳時代の土器としては７点の土師器と４点の須恵器がある。土師器はおおむね６世紀代に属すると思われる。５・６は内面黒色土器で，外面口縁端部も黒色となっている。甕はハケ目の調整痕がみられる。須恵器は８・９が６世紀前半，10が６世紀末，11が７世紀代に属するものと思われる。

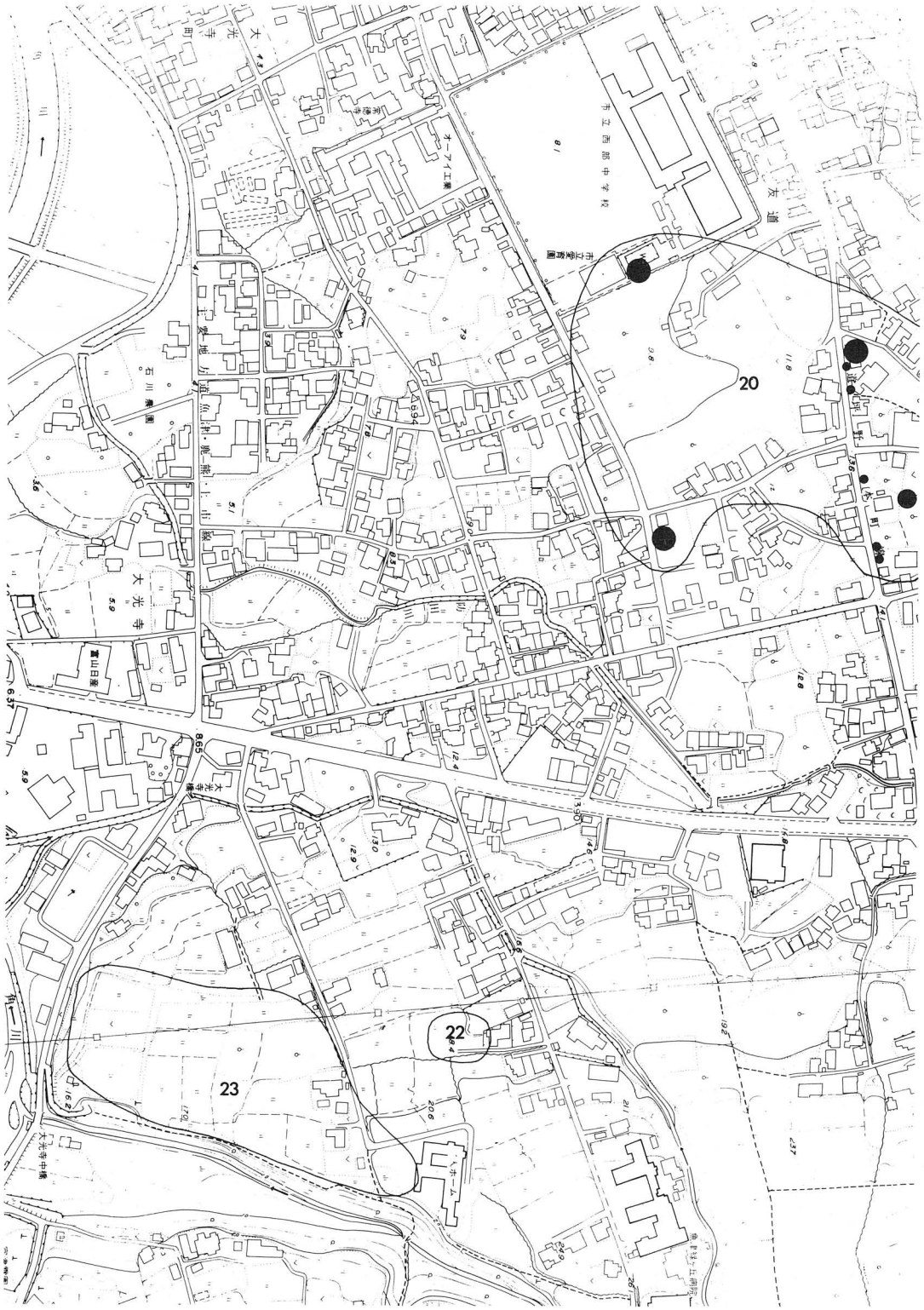
友道遺跡の主体を占めるものは奈良・平安時代である。採集した遺物は土師器と須恵器であるが，採集品であるため土師器は細片が多く，図示できるものは少ない。量的には須恵器は土師器の約３倍採集されている。土師器では甕が多く，口縁が『く』の字に屈折するもので，口壺縁端を折り返えすものは存在しない。杯では底部がヘラ切りで，糸切り底はみられない。須恵器は大半が杯と杯蓋であり，破片では甕・壺類も存在する。大半がヘラ切りで，糸切り痕は杯蓋21のみにみ



第10図　友道遺跡出土遺物



第11図　友道遺跡出土土器



第12図　友道・大光寺地区分布図（1/5000）

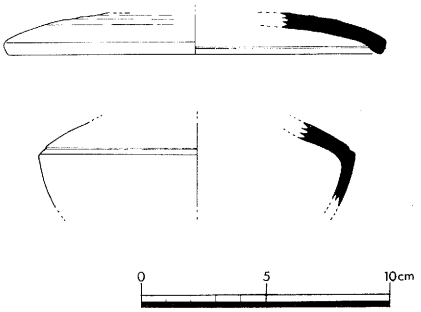
とめられる。杯では須恵器が圧倒的に多いこと，糸切り痕がほとんど存在しないなど，奈良時代に属するものが多いと思われる。

21．友道神明社遺跡

友道神明社に隣接する畑地から土師質土器の破片が採集されている。年代は中世のものと推定できる。遺跡の範囲等は不明である。国道８号線バイパス予定地に含まれており，早急に遺跡の規模・構造等を把握する必要がある。なお，友道神明社の神体は石器であるといわれており，付近の踏査を重点的におこなったが，付近に縄文時代の遺跡は発見できなかった。

22．大光寺Ｂ遺跡

大光寺遺跡の北約50ｍの地点に，10×10ｍの狭い範囲に，奈良・平安時代の須恵器・土師器・珠洲焼の散布が認められる。遺跡は大光寺地内に所在するため大光寺Ｂ遺跡とする。遺跡は水田と宅地にまたがっており，水田地帯の遺跡の広がりが限定できないため大光寺遺跡と連続する可能性もある。図示した遺物は採集遺物のうち器形の復元できるものである。



第13図　大光寺Ｂ遺跡出土土器

23．大光寺遺跡

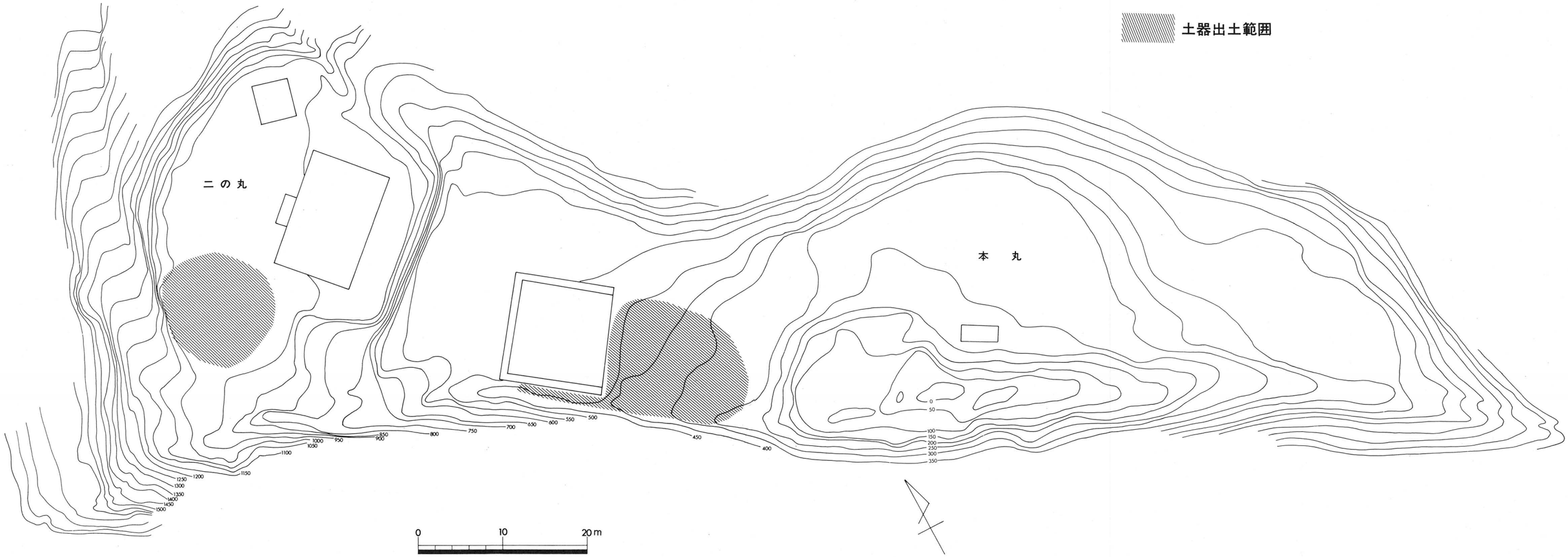
野方台地の末端の角川に面した段丘上に立地する。1965年に発掘調査がおこなわれており，縄文時代中期を中心とする集落であることが判明している（文献５・６）。 特に大光寺遺跡を著名にしたのは富山県内初の火煌土器の発見，大木系の完形土器の出土である(文献７・８)。遺構としては住居跡が確認されている。野方台地における縄文時代中期の拠点集落の一つである。

今回の分布調査では過去に調査された水田を中心に縄文土器の分布がみられ，北側の宅地から老人ホームにかけて，奈良・平安の土師器・須恵器，珠洲焼の破片が散布している。分布調査期間中に新川ハイツの建設がおこなわれ，従来の遺跡の範囲からはいく分はずれていたが，立合調査をおこなったところ基礎工事で掘りかえした部分より珠洲焼の破片が出土した。東北部にかけての遺跡の広がりを確認することができた。

24．宮津Ｂ遺跡

野方台地の角川に面した段丘崖上に位置する。縄文土器の散布がみられたが，圃場整備，土取り等で大半が消滅している。

第14図　天神山城跡測量図



文　　献

1．魚津市教育委員会・富山県教育委員会　1959　『天神山遺跡調査報告書』

2．麻柄一志　1983　「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』第２号

3．牧野正雄　1966　『天神郷土考』

4．魚津市教育委員会　1981　『印田近世墓』

5．魚津市教育委員会　1967　『大光寺遺跡報告書』

6．広田寿三郎　1967　「魚津市大光寺出土の馬高式土器」『大境』第３号

7．富山県　1972　『富山県史』考古編

8．山本正敏　1982　「考古」『魚津市史』史料編

魚津市埋蔵文化財調査報告書第10集

富山県魚津市

遺跡分布調査概要Ⅰ

昭和58年３月30日発行

発行　魚津市教育委員会
〒937 魚津市釈迦堂1-10-1
印刷　小浜印刷